

# “地理テツ” に贈る 3 冊

静岡県立裾野高等学校 伊藤 智章

「地理好き＝鉄道好き」の確率は非常に高いと思われます。「鉄道本で3冊を」というオーダーに、なかなか絞り込めずに苦労しましたが、「地味」高く、「鉄分」豊富な旬の3冊を選んでみました。

## 吉村 昭『闇を裂く道』（1990年、文春文庫、本体629円＋税）

1918（大正7）年着工、7年の歳月と67名の犠牲者を出して完成した東海道本線「丹那（たんな）トンネル」をめぐる技術者と現場、そして住民たちの物語。

トンネルの着工が決まり、熱海に測量事務所が設置され、住民達に大歓迎される技術者達。しかし、工事が難航し、度重なる出水や生き埋め事故が起きるにつれて、住民と工事関係者の蜜月は徐々に冷めたものになっていく。特に、豊富な湧水を使ってワサビ田や酪農（牛乳を冷やして運搬するのに利用）を営んでいた丹那盆地の住民は、トンネル工事が進むにつれて壊滅的な打撃を受けてしまう。

技術者達を温かくもてなしていた丹那の住民達が、怒りと絶望を抱えて集団で事務所に乗り込もうとするシーン、活断層がトンネルを切り裂き、作業員を閉じ込めた「北伊豆地震」（1930年11月26日）など、手に汗握る描写の数々を追っていると、日本の大動脈が、多大な犠牲とリスクの上に成り立っている事が実感できる。

折しも「中央リニア新幹線」が南アルプスの地下を貫通する計画が立てられている。その是非を考える上でも、是非読んでおきたい鉄道歴史文学の傑作である。



## 西村 京太郎『十津川警部とたどる時刻表の旅』

（2012年、角川 one テーマ新書、本体724円＋税）

意外なことに、著者は最初から「鉄道モノ」を書いてきたわけではない。編集者から「あなたの作品はあまり売れないので、書く前にテーマを持ってきてください。こちらで判断しますから」と言われ、出した企画から編集者が選んだのが、十津川警部が活躍する、自身初のベストセラー「寝台特急殺人事件」（1978年）だったという。

総著作数500冊以上。年間10冊の新刊を出す「トラベルミステリー」の巨匠は、時刻表を読み、路線地図や列車編成図を使ってトリックを練る中で、ネット検索では絶対に思いつかない「事件」を創りあげる。

一度の取材旅行で新刊2冊分の取材をするという著者。時刻表と地図を読んで計画を立て、トリックのアイデアを求めて現場を歩き回る姿は、まさに「フィールドワーク職人」である。各作品の取材秘話はもちろん、観光地化ですっかり変わってしまった場所の今昔、地形を生かした路線や景観の紹介など、日本地理の本としても十分に楽しめる。



## 富手 淳『線路はつながった 三陸鉄道復興の始発駅』（2014年、新潮社、本体1,200円＋税）

三陸鉄道の開業と同時に大卒新入社員として入社した、現旅客サービス部長の手記。2011年3月11日を宮古駅の本社で迎えた筆者。壊滅的な打撃を受けた路線の復旧と住民とのつながり、連続ドラマ「あまちゃん」ブームの舞台裏など、「震災後」のエピソードも興味深い。特に読み応えがあったのが、3章の「三陸鉄道マイヒストリー」である。

本社総務課員からスタートして車掌、運転士、運転指令、企画とキャリアを積んでいくなかで、「開業時から第三セクター」という特殊な状況下にある三陸鉄道をいかに維持していくかの奮闘には、地方のローカル鉄道が置かれた厳しい条件とそれを維持する事の苦悩がにじみ出ている。

三陸鉄道は津波に対応するルートで建設されたのに対し、旧国鉄路線は、より沿岸を通っていたところが多いという。JRが復旧を断念してバスによる恒久輸送に振り替えた所もあり、筆者が震災前に次々に仕掛けた「JR相互乗り入れイベント列車」も、元通りに走らせることはできない。それでも地域の足として、顔として今後の展開に大いに注目したいし、「被災地」として単純に一括りにせず、三陸地方の地理と歴史を学ぶ上でも示唆に富む一冊である。

